

眞生

第九卷 十一號

- 靜に思へば社會の變化は恐ろしいものはない。昔は米が豊作で喜んだ農民が今日は反つてその爲めに困つてゐる有様である。
- 其の他、昔は産物不足で一般が困るのが本當であつたのに、今日では反つて生産過剰で全く人が困つてゐる。
- 此の意味に於て、今日の不景氣は米が足りないからでもなく、買ふ品物が無いからでもなく、反つてそれがありあまるほごあるからだと云ふ。
- 無くて困る世の中はあつたが、あつて困る世の中は今日が初めてある。實に世の中の變化と云ふものも恐ろしいものではないか。
- 其の故はあまりにお米がとれすぎた爲めに米の値が一時に下りその爲めにお米を賣つても借金してかけた肥料代にも當らず、今日の生活にも困ると云ふ。
- そしてまた、多くの實業家が産業不振に困つてゐるのも産物が賣れない爲めに、物價の停落は其の生産費にも當らぬので全く立行かぬ有様である。
- そのくせ、社會の一般は一方にありあまるほごの米があり、生産品が腐さるほご山積せるにかゝわらず、金がないので食ふこともできず、着ることもできないで全く困り抜いてゐる。
- して見ると此の生産の過剰と云ふのは決して民衆一般需要の不足と云ふのでもなく、又一般民衆に對する供給の過剰と云ふのでもない。たゞそこには有無相通することできない一つのものがあるからに過ぎない。
- 然は此の有無相通することのできないものは何であらうか、そして私共はそれを私共の力によつて之を取り去ることはできないであらうが、そこに識者の一考を待つ所以がある。(念)

目次

是三無差別	尅子
淨化	尅子
無量壽佛について	土屋觀道
思想信仰と生活	土屋觀道
日記の中より	故藤村健三
吾朋便り	

是三無差別

「苦しい時の神頼み」と云ひますが、苦しい目になって、神をたのんだ者には、初めて「神」があります。それを「頼み」もせずに「神」が有るか無いかを論じてゐるから、いつまで経つても「神の存在」が決められぬのです。

「頼んだ」者には「神」がある。

「頼む」ような「苦しい目」に遇つた者にして、初めて神や佛を見出すのです。神や佛を造り出すことも云へるのでせう。

「神や佛」が有つたら信じようと待ち構へてゐる者には、いつまで経つても神や佛の出て来る氣遣ひはない。

要求のないところに發見の有らう筈がありません。

だから神の有る無しに不拘、「頼まずに居られぬ」事實にプチ當つた時、初めて此の必然の事實が「神の存在」を決定するのです。

キリストも「神は試むべからず」と云つて居られます。佛が有つて信するのではなく、「信する」事實が先きで佛が生ずるのです。いや「信する事」ソレ自身が佛の存在で、「信する事實」と別名で「如來」とお呼びするのだと思つて居ります。

だから「信」と「佛」と「我れ」とは一体で、一物の三面觀であります。それで經にも古來「心佛及衆生、是三無差別」と説かれてゐるのでせう。(尅)

今度十日間ばかり、信州や越後や、北陸地方を廻はらして頂いて感じたことは、初めは何彼とお話しさせて頂く事が多かつたが、だん／＼話す事が無くなり、話す事が厭やになつて話が下手になり、皆さんに色々話して貰ひ、私は聞き役になり、澤山教へられて歸りました。私としてはこんな有難い事はありません。

又行つた處の方も喜んで私を見るなり、スグ掴まへて、それからそれへと、續けさまに此頃の信仰上の心持を話され、とても愉快に、ます／＼元氣になつて行かれる、私もツイ引込まれて共に悦びの力に充たされたような譯でした。

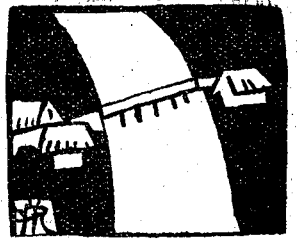
淨化

よく自分で自分の様子を振り返つてみるのに、だん／＼お念佛を申さして頂くと、自分の心の中にゴタ／＼した色々なコダワリが、そのお念佛の光りの爲めに溶かされ、消えてゆくようであります。そして胸の中が空っぽになる、ゴロ／＼した塊りが一つも無くなります。だから取り立てゝ話すこともない、それでゐて心中一杯に力に充たされ、身も心も軽々と活氣に充ち／＼、勇氣凜々としてゐます。

本當の力といふものは、斯ういふ「空」に即したものではありませんまいか、「毒々」しさ、「俗々」しさが失くなつて、「清淨」しさに充たされ、此の清淨しい「信の一点」から發して來た時に、さういふ俗々しい事も忽ち一刀兩斷に解決され、清淨化されて行くものであることを感じました。

眞諦が俗諦の中心であつて、そのために俗諦が眞諦化されてゆく、それでこそ理論と現實とが二つでなく一つになつてゆきます。信仰と實際とが別々のものでもなく、理論と實生活が離れ／＼のものでもなく、一々實際の活事實となつて行きます。

實利實業にたけてゐて、生活中心の信念體驗に薄く、中心原理の探求に深く究めてゐるが、それでゐて、實生活上にその心念が働かぬといふのは、いづれも此のお念佛によつて自分が打ち砕かれ、コナサレて居らぬからで、お互にもう一層眞實念佛を修したいものであります。(尅子)



無量壽佛について

土屋 觀道

□阿彌陀佛を光明無量、壽命無量の御佛とすることは多くの人の知るところである。そしてまた、其の御佛が智慧と慈悲の御佛でましますことも、又よく人の知るところである。乍然その智慧と慈悲とがいかなるものであり、光明と壽命とがいかなるものかに至つては眞に之を知るものは少いかも知れぬ。

□然に其の智慧とは天地の道理のよく我がものとなつたことであり、慈悲とは其の心に從つて一切を生かす心である。而して光明と云ふは闇を照すの光を云い、壽命とは生きて働く命を云ふ。従つて如來の智慧は物の道理を照すが故に之を光明に譬へ、佛の慈悲は物を生かすが故に壽命に譬ふ。

□然に佛と云へば智慧のない佛もなければ慈悲のない佛もないが、佛の智慧が光明であり、如來の慈悲が壽命であるならば世に光明と壽命とのない佛もない。而して、いかなる佛にも有限なる光明と壽命との佛はないのだから、若し無量壽無量光と云ふことが阿彌陀と云ふことなれば此の阿彌陀でない

と云ふ佛はないことになる。

□して見ると佛と云ふ佛の中に一として阿彌陀でない佛はないとなれば所謂大無量壽經に説かれた佛と云ふものは一切諸佛の所有してまします阿彌陀の總代表と申してもよいことになる。然に一切の諸佛と各々阿彌陀と云はすに大經の上に表れ給ふた佛のみ阿彌陀佛と申すのは何故であらうか。そこには一切の諸佛と異つた何かの理由がないとは云へまい。

一一

□それについて、先づ如來の光明とは何であらうか。若し如來の光明が天地を照す智慧の光とするならば一切の衆生の闇を照すものは天地の眞理である。然らば天地の眞理こそは即ち衆生の心を照す佛の光と言はねばならぬ。而して宇宙の眞理が即ち又天地の眞理であつて、宇宙の眞理の外に天地の眞理もないものならば宇宙の眞理は即ち如來の御光である。

□而も此の御光は天地到るところに到らざるはなく、一切萬有の上にも照り輝いておるところから云へば如來の御光は天地あまねく到らざるはないと云はねばならぬ。而て此の御光はいつも永へに一切衆生の心妄を破るの光であり、常恒に衆生の心の上に輝く宇宙の眞理である。而して、光明が眞理であり、眞理が如來の智慧であるならば宇宙の眞理と如來の智慧とは決して二つのものではない。

□従つて、宇宙の眞理が一切萬法の上に行き渡つてゐると云ふことは即ちまた如來の智慧光が十方の世界に到らないところはないと云ふことになる。而して慈悲とは一切を救ふの心である。言かへればすべてのものを殺さぬの心である。従つて生きものを殺すを以つて無慈悲とする、生物をあはれむと云ふを以つて其の慈悲の大なるものとする。この意味に於て、慈悲は佛の壽命に譬へてある。

□而して壽命を慈悲と云ふことは五戒に於て不殺生戒を破るものは其の人の壽命が短かく、之を守る

ものはその壽命が長しとしてある。従つて壽命無量と云ふことはそれだけ不殺生の人であると云ふことを示すことであり、佛が無量壽でましますと云ふことは即ちそれだけ佛が大慈悲でましますと云ふことになる。して見ると佛が無量壽であると云ふことは佛が大慈悲であると云ふことと同じであつて無量壽と云ふことはたゞ單に永く生きると云ふことではない。

三

□而も、光明無量、壽命無量と云ふことが御佛の智慧と慈悲と云ふことであるならば佛の智慧とは天地の道理に徹した宇宙の眞理であり、佛の慈悲とはそれに従つて一切を生かすことであると云はねばならぬ。而して此の意味からして、宇宙の眞理が天地の萬法に行き渡つてゐることはやがて一切がそれによつて生かされてゐると云ふことになる。

□そしてまた、一切が生かると云ふことが天地の道理に従ふより外にその意味をなさぬことであれば私共が佛となると云ふことも、其の究極を眺むれば私共が天地の道理に一致して、其の道に従ふと云ふより外に眞に生きるの道はないのである。

□此の意味に於て、私共が佛の光明に照されると云ふことも、佛の慈悲の中に働くこと云ふことも其の究極に於ては一つである。

四

□然は阿彌陀佛が無量壽光にましますと云ふことはやがて阿彌陀佛が智慧と慈悲とにましますと云ふことと同じであつて、又阿彌陀佛が無限の智慧と慈悲とにましますと云ふことはそのまゝ阿彌陀佛が無量壽無量光でましますと云ふことと同じである。

□而して如來の智慧と慈悲とが宇宙の眞理に徹底して、それに従ふべく一切の衆生を救ふのが如來の光明と壽命ならば佛の壽命とは一切の衆生を救ふ以外に佛の壽命はあるものではない。従つて阿彌陀佛が無量壽にして大慈悲にましますと云ふことはそのまゝいかなる場合にも私共を救ひ助けて、常に無限の光明と壽命の中に私共をあらしむると云ふことになるのである。

□而も佛の壽命と云ふものは單なる存在の意味ではなくして佛の壽命として無量壽と云ふことであれば佛の無量壽と云ふことは如來の大悲の無量なることを示すものであつて、如來の智慧光はやがて一切を生かすところの慈悲光でなくしてはならない。従つて佛の智慧光と慈悲光とは決して二つのものでなく、其の究極は一つである。

□従つて、私共が如來の御光に照されることは私共の心の闇がなくなること、心の闇がなくなることとはそのまゝ私共の生活が慈悲の心に蘇えることである。而て慈悲の心に蘇えること云ふことはそのまゝ私共の心が眞實の道理に従ふことであつて、その眞實の道理に従ふと云ふことは私共の生活が一切の處に生き活て行くこと云ふことであらねばならぬ。

□言かへれば私共の生活が如來の智慧光になれて、自ら天地の道理が明かとなり、すべての迷闇が消滅して、日常の生活が明るく楽しく、いそ／＼として働けるやうになることである。即ち人生き物生き一切が天地の自然に従つて生き活きて行くことである。

五

□然に無量壽如來の光明は十方を照して障礙するところなく諸佛の國土にも到らない所がないと云ふのです。然は如來の光明は私共の世界にも亦照り輝いて居ると云はねばならぬ。此の意味に於て如來の御光が宇宙の眞理であり、如來の大慈悲が一切を生かすの力とするならば此の大自然の中に輝く宇

宇宙の眞理と、それによつて生かされる宇宙の一切は正に如來の限りなき智慧と慈悲との中にあると云ふべきではないか。

□それが見えないのはたゞ私共の力が未だ之を見うるほどにまで到らないが爲めであつて、それが必ずしも御佛の御力がないと云ふ保證にはならぬ。それは恰も眞晝に盲者が太陽の存在を否定するにも等しいものである。

□此の意味に於て如來の御光は人の知ると否とにかゝわりなく天地を通して宇宙に輝く一つの眞理であり、一切を通じて一切に現はるゝ佛の大慈悲である。凡ては之によつて動き一切は之によつて生かされる。まことに之をこそ如來の智慧と慈悲と云はすして何と云はうか、實に如來の御力は満全の力を以つて、已に一切の上に働いてゐると云つてよい。

□従つてあとに残されてゐるものはたゞ之衆生の自覺あるのみである。自覺とは天地の大道によつて生きるの目ざめである。如來の大悲に合掌するの一念である。之を南無阿彌陀佛と云ふ。念佛の外に佛の求め給ふものはない。

六

□念佛とは如來の大悲に合掌するの心である。之を言葉に現はせば南無阿彌陀佛となり、之を生活に現はせば眞生の一つにある。即ち念佛は南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛とは一切を佛に任かすの生活である、言かへれば一切を天地の大道に任かせて無理なき生活に自らを生かすことである。

□限なき如來の智慧と慈悲との中に此の身と心との一切を任かせて生死も共にその中に送るのである。言かへれば無理なき生活、眞理を中心として、よこしまなき生活を云ふ。そこには賢愚も善惡も問ふところではない。一切が如來の御心の中に許し生かされて、共俱に喜びと望みと力の中に生くる

のである。

□さうして、物を無にせぬ心、一切を如來にさへて如來の御心に従ふ心、言かへれば自他共に生きるの生活である。

□靜に此の世を觀すれば一切は天地の恵みに充つる。一切はあげて天地のふところにある。恵みよ、力よ、それは一切が如來の力である。天地一切が我を生かし、人をも生かす。自分たちはたゞすなはにその道に生きればよい。宇宙の力は我を通して現はれるであらう。

(一九三〇、一一、六)

思想、信仰と生活

土 屋 觀 道

一、生活と思想

□若し人間がたゞ生理的に衣食して行くと云ふだけで終るものならば私共の生活にはそこに何等の思想も信仰もいつたものではない。

□乍然それは未開時代の原始人ならいざ知らず、少くも今日の生活には何等の思想、信仰がなくしては眞に生きるに云ふことはあり得ないことである。

□この意味に於て私共はどんな意味での思想と信仰とが本當に私共を生かしむるであらうか、少しく其の点に就いて考へて見たいと思ふ

□中にも思想と信仰とを生活の上について考へて見るに

多くの場合私共の思想信仰は常に私共の生活を持続し向上せしむる上に於てのみ、之を肯定しやうとする傾きがある。

□そして、それ以外の思想や信仰は何故か私共は之を否定して信じまいとする。して見ると私共の思想、信仰と云ふものは本來思想、信仰と云ふものがもとではなくて、其の思想信仰をして然らしむるものが其の外にあるのではなからうか。

□このことを心に於て、私共の思想信仰の成立を考へるとき、私共の思想信仰はその大部分に於て、自から生かし、自らをよからしめんとするの欲求に應ずるものな

ることを知る。

□謂換へれば私共の思想と信仰は人類生活の向上と發展とに一致すべく考察せられ、又構成せられるものであると云ふことができる。従つて此の意味からすれば私共の思想と信仰とは私共の實際生活に先行することはできないものであつて、私共の實際生活こそ、其の思想と信仰とに先行するものと云ふことになる。

□之はもとより、私共の思想と信仰とが私共の實際生活をよりよくせしめる以外、私共の思想信仰となり得ないものであると私共が考へるから起ることではあるが、乍然この考へは必ずしも私共の單なる空理空論から割出した獨斷ではない。

□否、それどころか、古來幾多の思想信仰の興廢盛衰の由つて來たるところを見るに、いかなる思想も信仰も私共の生活に反して起つて來たものなのによつても之を知ることができると思ふ。

□だから私共の思想信仰が當時の社會に歡迎せられるのは私共の思想信仰が其の當時の社會生活に助けとなると思はれる間のことであつて、若もそれが社會の爲めにならぬと考へる場合には自らそれは社會から顧みられなくなるの傾きがある。

二、生活と其の標準

□このことは、又一面理想と生活との關係を考へて見ても明かである。何となれば私共の理想と云ふものが私共の生活と關係なしに考へられるものでないからである。

□そしてまた、私共の理想は實際の生活を悉く否定して別に他方土に其の理想地を要求したとしても、其の理想地なるものの思想内容と云ふものが、此の土の生活と全く離れて別存することのできるものでないからである。

□この意味に於て、私共の生活と理想とは決して實際より離るべきものでなく、いつも私共の實際生活から其の實際生活に都合の悪いと思ふものを抜きにして、それと同時に私共の實際生活に都合よしと信ずるものを取り入れて、そこに新たな一つの理想境を造るのが多くの人々の理想地であるからである。

□従つて、たといそれが佛陀の教へであつても、亦その他多くの偉大なる人々の教へであつたとしても、その人各自に於て自らの生活に眞に即することのできない教へならば恐らくはそれらの思想や信仰は決してその人々のものであることはできないであらう。

□此の意味に於て、各自の思想と信仰とは其の人の生活の程度に於て必ずしも同じであるとは云へないものである。

三、時代と生活

□而もこのことは其の時代と境遇の變化によつて、常にその生活の形式と内容とが變つて行くのであるから、必ずしも之を固定的に其の是非を定むべきものではないかも知れぬ。乍然、昔の社會を今日の社會とが其の社會生活に於て、非常な變化を來たして居ることは事實である。

□否、少くとも或る部分に於ては已に重大なる社會組織の變革を來たして居るものもある。即ち徳川以前の封建制度が崩壊して、今日の資本主義制度となつてゐることは争はれない事實であらう。従つてまた、其の社會に生くるべく從來の思想や信仰も可なり變つて來てゐることも亦確かである。

□乍然、然れ今日の社會の思想や信仰は悉く現代に適すべく變化してゐるか云ふに、之また必ずしもさうとはかりは云へぬものがある。

□之は一面人間の思想信仰が時代と共に悉く變化するものでもなく、亦そこには急激に變化し得ない事情もあるからである。殊に舊來の一部社會に於てはたとい封建時代の社會制度は崩壊しても、更に昔のまゝの生活の方が都合よい爲めに、昔のまゝの思想や信仰で之を持續して

り、また、それが本當であり、それであつてよいのではないか。否、それではなくては本當の思想や信仰は其の人の思想となり信仰となることはできないものではなからうか。

□尤も、誰として、正義を欲し、自由を尊び共に生活を樂しむと云ふやうな主觀的見方や、精進努力眞劍であれと主張することに反對するものはない。乍然甲と乙とが其の生活の立場を違にする場合、利害が全く反するやうな時がないであらうか。

□而もかうした場合、各人の立場は其の何れによるべきであらうか、同じ正義を欲し乍らも、甲乙全く其の見方を違にするときがないとも限らぬ。そしてまた、一方の自由は他方の自由を妨げ、他方の自由が一方の自由を妨げることがないとは限らぬ場合、私共は其の是非を何によつて定めやうとするのであるか。

□このことは單なる私共の杞憂ではなくして、現に今日に於ける色々の階級闘争に於て、資本家階級と勞働者階級、若は地主階級と小作階級、その他貴族階級と平民階級との上に於て、この思想信仰の標準の相違を見ることがないとは限らない。

ゐるものがあり。

□又たまたま、現代の社會に於ては現代に適すべき社會生活に立つべき思想と信仰とに入り易き人であつても、昔の思想と信仰との先入主の爲めに急に之を改むることのできぬ人もあるからである。

□この意味から云へば殊に我が日本民族の如きは封建倒れて、資本主義が起り、資本主義が行つまつて、社會主義が起つてゐるに、わらず、社會一般の民衆はあまりに時代の變化の激甚なる爲めに、其の思想と信仰が之に伴ふことのできないやうな有様である。

□このことは一面日本の不幸であつて近代文明が輸入文明と云はれるところであるが、多くの場合、すべてが外國の輸入によぎなくせられたもの、未だ充分に民衆の消化にまでなつてゐないからである。

□この点から云へば現代の思想も信仰も、否更にその根底となるべき私共の社會生活そのものが我國本來の基礎の上に成熟したものでなく、多くは外國文明の直輸入に過ぎない感みがある。

□従つて、今日の日本では一面封建思想と資本主義思想と社會主義思想とが、全入り亂れてゐるやうな有様である。この意味に於て、日本は其の思想も生活も共に一種の過渡期であると云はねばならない。

四、天下の大勢

□乍然、天下の大勢は必ずしも見定めつかぬものもあるまい。さういかに日本だと云つても、今日の日本は單なる日本の日本ではなく、正しく世界の日本である。

従つて、帝國の制度も生活もさういつまでも昔のまゝの状態であるものでもなく、またありうべきものでもない。

□従つて、今日の狀態は必ず或る時代を経て進むべき方面に進むものと見なければならぬ。而もその進むべき方面は何れの方面であらうか。少くともそれは封建への逆轉でもなく、また單なる資本主義への踏みとまりでもない。

□而もそれが民衆の生活に關係し、今のまゝで民衆が生活して行くことのできぬものとしたならば、民衆の自覺と民衆の叫びとは彼等自身の正義と自由と精進と努力によつて、彼等の生活を増進すべく、それらの思想と信仰との上に一大改造を試みるの時がないと云へやうか。

□此の意味に於て、新興民族としての無産大衆の思想と信仰とは從來の封建思想や資本主義制度を打破して、彼等の社會生活を充たすべく其の運動に出づることは理の當然と云はねばならない。

之等の人々をして少くともそれらの危害より逸かれしめて佛教の所謂自他平等の全一生活にまで之を誘ふの決心と活動とを願つて止まないところである。

(一九三〇、九、三〇)

日記の中より(十六年一月)

敬 藤 村 健 三 氏

〔二月十二日〕

學生として眞になすべき學びの道に身をさへげて努力する所にそこに學生たる人格は表はれるのだと、今日から一つ力瘤を入れる、經濟原論、マンスポント共に休み「社會主義と宗教」を圖書館にて讀む。二者の中に大なる反目あるが如く、二者の立場が共に進む事の到底不可能な事を始めの方に書いてあつた、時間の都合上全部讀めなかつた事は残念であつた。歸宅後「滅びゆく階級」を讀む、一寸面白い事が書いてあつた。近頃は本を讀みたい心が一ぱいなつて来る。

〔十三日〕

放課後同姓藤村健一氏を月江寺に連れて行つてやる。

総一君に如來の御顔を見せてやる、木魚たいて南無佛を云はせてやる、餘り悪い心持ちじゃないという、寺も良いものだ等といつて居る。これから一人／＼を力強く信仰に導こう、それこそ眞に朋友たる義務である、今日同君と早川君とが財布を体操中に盗まれた相だ、少くとも學生の仕業とすれば高等教育をも受けて眞に盜の悪い理由を知らざるは遺憾である、「盜をなすなかれ」と教育者は教ふるが、何故なして悪いかを眞にさとるだけ教へてくれる教師はない、又教へられないのだから。今晩は大寶寺に眞生同盟員集る、市電に於て「神人會」を讀む、一紳士ありてこれが曾我尾氏なりとは本が引き合せたのだ、大寶寺に行く米田兄、古屋氏、長圓寺様、大

山氏見ゆ、後より豊田氏、市岡氏も見へ、賑かになる。今日は原稿を集めて豊田氏より印刷所にわたり後自分達發送部に來る相だ、大寶寺は實に居心持のよい寺、皆歸ろうと云ひながら歸れない。基本金募集の事にて上人は何か事業でもやつたらとの事だが、大阪の連中は皆そこまで話を進める者が無い、今度の光明は眞生同盟の機關雜誌として大に面目を一新する相である、多くの人々から寄稿を集める事を本旨として居る、清い集りのあとのすがしき氣持ち、南無阿彌陀佛と高唱しながら歸る。

〔一月三十一日〕

姫路の友山田氏歸宅に付き朝より訪問す、十時をすぎた云ふのにまだ朝食を食つて居る、まづ色々話し、自分のこの精神上の變化を來たした事等宗教の話など大氣焔をなし山田氏も大分聽いてくれた。

二人の友達が話し會ひ、一番面白かつたと云ふ時はたしかに二人の心そのものがその儘自由に露れ出た時だらうと思ふ、二人の友達が月日のたつまゝに氣が合はず、話しが出来ない様になるのは二人の心理の變化にある、心理そのものが堅固にある信念の下に二人が進むならその變化に多少の相違があつても友として快く話し合ふ事は出来るであらう。然し二人の信念が全く異つた方向に

去る時、自然の勢として二人は離れ勝になる、我等の友幾人ありとも彼等が一つの信念のもとに目的に向つて進むなれば、彼等は正に永久の友である、これは二人の眞理が結合されたからである、舊友と逢ひ變らぬ態度で話し合ふ事は眞にうれしき事である。然しながらそこに何か少しでも向上がなければ面白くない、淋しいそれこそ信仰の力、念佛の力が全人類に必要である。

思ひ出るがまゝに (病中雜觀)

〔十月二十五日〕

我は今肉體の動物的健康を誇る者を痛切に憐まざるを得ない。何の爲の健康か、如來が何故に彼等に健康を給ひしか、これより先に何故に彼等は健康を誇らねばならぬのであらうか、「まあ體さへ達者でありさへすれば」は斷じて眞の人生では無い、唯わけもなく健康を誇り、偉大なる肉體を誇る者は豚、鶏を相手にすべきである。巍々たる山岳に走る野獸は確に健康である、然しその健康が單に食物を得る爲の物ではないか、動物的健康以外何處にある、人たる者が唯健康そのもののみに絶體的の價値はなくしてその健康が眞に人類に對し、總ての社會に對し、貢獻する所に價値があり、價値づけたる人は彼の

健康を讃むのである。

△現在を價位するや

それが如何なる境遇にあらうとも、その現在の境遇を人生の意義に對して、價値あらしむるは偉大なる力である。逆境は人生を價値せけると云ふ、それは眞に人生に對して眞剣になり得るからである。

然し健康にして家庭も平和に安定といふ幸福なる人は人生に對しいくらでも奮闘をなし得るのである。そして今我の現在の生活を反省するのである、病氣であるといふ一大苦痛がある、この苦痛を生かす所に價値の生活がある、然らば如何に生かすか？ 力少なくして生かす事が出来ない、生かさんとすればそこに努力が要る、努力は然し今は禁物である。然し人生を價値するべき程の努力を他の事に注いではいられないか？ 努力とは即ち力の消費である、然し或は今消費すべき物に對し、身体に害ありと稱して惜んで消費すべからざる物に對して消費して居つたのであつた、こんな事位は御上人は幾度話されたか知れない、そして自分は今まで知識として大事相に持つて居つた。然し今や現實にこの問題は自分の問題になつて居る、人に話すべき知識のみにては無い事をしみ／＼と知つた。人々は如何に自慢相に人に話して居る

事柄それ自身がまるで知らぬかの様な生活をするものだ」と云ふ事をしみ／＼考へた、當面の問題を解決すべし、自分の知識を引出す事が出来なかつたのだ。本當に反省の生活だ。反省により如何に愚なる生活を自分自身が現にやつて居るかを知らるゝ。

△努力は果して苦痛なりや

精神的にもせよ肉體的にもせよ、努力！ 働け！ これ皆人間にとつて苦痛なものであらうか、働く事の苦痛は自個の意に伴はざる活動をなす時に訴へらるゝのである。即ち自分の生命が活動する事を慾せず、謂はば生命を寢むらしておきながら肉體のみを活動せしめんとするが故である、肉體を活動せしむる根本生命を寢むらしておきながら、肉體を無理矢理に働かせしめんとするが故である。こんな間違つた事もない、故にその間違ひから苦痛が喧はれるのである。慾せざる事をなさんとするが故に苦痛なり、即ち慾求して止まざる物をなす時そこに努力も働きも少しも苦痛に感ぜられないのである。

辨榮上人の御歌

いさぎよきこゝろざしよりなすわざは

くるしみさへも樂しかりけり

我等生命の躍然たる時、我總ては躍然たるのである。

自分ばかり病氣をやつて居るこの境遇を如何に生かすかの重大問題にぶつかつて居る。そして努力は体の爲悪いと云つた。努力は何故に悪いのか？ 即ち苦しいからである。然るに今や生命が躍然としてその事に活動する時苦しみもなくしかも楽しいのである。されば我は今唯生命の如何によらず、求めてく止まざるものは人格の向上と念佛への精神のみ眞剣に求むる所の努力は歡喜である。

△念佛と病氣

川村理助氏の体験生活の一節

「生物の生命力と申すものはそれ自身に新陳代謝の機能を営み、病氣障害を天然自然に征服して行くものである、生理學で云ふ自然良能と云ふのは即ちこの生命力のことです。如何に醫者の治療を受けましても、この自然良能即ち生命力が働いてくれなければ癒るものではありません、そしてこの生命力は心身が完全に統一した時最も活潑に働くものである、故に念佛によりて心身の統一を完全にすべきであります」。

我は今病中にある何事をなすにも苦しいのである。又出来ないものである、唯念佛のみは自由である、又念佛するより外に仕方が無いのである、その念佛が我等病氣を

治療するになざるべからざるとは本當に我念佛一心の生活にさうしてもこうしてもこうに追ひつめられたのである。

然もこの念佛が我等の最も欲求せしものであり、一生もこれに貫かならぬのである。

我は念佛したい、何ものにも束縛されずに自由にやりたい。しかもやれない、こゝに努力が入用だ、さうでもこうでもやらずに居られない。やらずに済ます事が出来ないのだ。やれるその時は唯生活が活躍する時だ。念佛やれたら生命躍然たるのか？ 生命躍然として念佛生れるか？ ちらでも良い、唯やる事だ！

如來これを聞き給へ、この念佛の喧びを。

南無阿彌陀佛！ 南無阿彌陀佛！ 南無阿彌陀佛！

△驗溫する時と念佛する時の心境

驗溫して居る時今やつて居るという意識はどんなに努力したつて追ひのけられない、頭のかげにこびりついて居る。外の事を考へようと思つてもその事はうわの空で心はやはり驗溫にくだり入つて居る、くだり居るとばい熱くなる、するさうとてもたまらなくなり到底心を外にうつす事は出来やしない。これは病氣した者のみが體驗がある事と思う。

念佛する時これであれば良いのだ、外の事を考へようとしたつて到底考へられない。外の事はうわの空で佛のみ念頭にありやいゝのだがこれで反對に念佛がうわの空になり外の雜念がわいて来る。これは心の中の相異である、「熱がありやたまらない」と自分自身の重大問題だからである。念佛はまだそれ位に考へて居ない證據である。佛の事があたまにこびりついて、外の事考へようと

思うても到底考へられぬやうな境地、これを眞の自由の境地と云へるのだ、そんな境地があるかいなと疑ふなら驗溫器の實見で立派に立證された。「思はずには思られない」と云ふ境地こそ今年は何邊體驗したかわからない。眞に何事も考へずに佛のみ思へばよい、すりや一氣に統一されて仕舞のである、自己の生命が大宇宙の生命へと流れとけこんで行なのだ。

吾朋便り

東京 土屋觀道

愈秋冷の候となりました。燈火親しむべきの頃となりました。各地の道友にも御變りはありませんか御伺い致します。

次に私の方では最近まで一同無事、近來にない喜びでありましたが、昨朝から長女的美智子が急にお腹をこわして困つて居ります。今日幸にもよほどよい方ですがまた安心はなりません。それにしても此の分で行けば先づよい方と用心を專一にいたして居ります乍他事御安心下さい。□次に序でだから先達からの巡禮日記を

書いて置ませう。私は去十四日(十月)の朝の中に名古屋の尾上銀子様を其の病床に訪れて、午後から佐屋の黒宮様を御訪ね申しました。奥様が永くの間御病氣でゐられたからであります。それから其の夕四日市に行く豫定でしたが津からの電報で其の夜はその方へ行きました。黒宮様と渡部秀夫様と三人連でした。□津市の集り。彼の地に着いたのは夜も已に八時半を過ぎた頃でした。直に入車に乗せられて長谷川様の御宅に運ばれました。阿部様の方では御主人不在と云ふので其の方で開くことになったのです。集まるものは十四五人でありましたが當家の御熱心なる勧誘によつて遠い處から

まで來て頂いた人のあつたことは感謝の極みでした。宿は阿部様でさまして頂きましたがかうして道友の心に信者を集めやうと云ふ心の動いて頂くことは私の最も喜びとするところであります。□大石の集り。十五日は大石の集りでした。彼の地に着いたのは午後一時頃でした。渡部、阿部、佐々木の三君と同道でした。夜の集りは七八名もありました。うかが、何れもその熱心な方には感じ入りました。中には二里も三里もあるところから來てくれてゐる人が多いのでありました。私の話の前に東京の神谷さんが御話し下され、私の話の終つたのが十時頃でしたが、それから座談會に移りまじ

たところ、話は一層に熱烈となつて夜の一時の過ぐるのも忘れろほでした。主として問題は宗教と生活や時事問題から社會制度の問題や今日の學校教育問題や道德生活のその標準問題等に入つて行きました。

□その中でも宗教と生活とが密接な關係にあるか云ふことは已に當地の人々によく承知してゐる所でありました。その方の問題に關しては可なり真剣なる共鳴者があるものであります。乍然今日の宗教問題が學校教育の上に殊に學校の倫理道德の中心生命となれば本當の教育と云ふものは成立しない云ふことに至つては未だ之を知る人が少いのであります。此の點に於て、集つた人の中でも小學校の先生方の中には熱心に研究して頂いたことを共に喜ぶものであります。□尙今日の青年訓練所や在郷軍人會等に於て、色々の教育や訓練をやつて居るのであります。それらの教へがともすれば單なる軍國主義的な所謂戰時教練になり終つて、之等の一切を統攝する人格主義的な教養や社會常識を欠くもの、多いことなどにも説き及びました。其の他今

日の所謂社會主義者や、労働者運動が主として勞資問題以外眞生の大道を知らないことに對して私共の眞剣なる社會運動の必要を説いたこともさよりでありました。

□松坂の集り、十六日は松坂での集りでした。晝の間は暇でしたから、大石の方で谷口様の離れて手紙などの整理をしました。松坂に行つたのは夕方からです。松坂での集りは今回が第一回であります。が未だ當地には道友と云ふものがそれほごにないので主として谷口(年泰)氏が發起となつて當地の道友二三の人と一緒に集つて此の會が催されたのであります。會場のことで一二手違いがあつて發起者の側としては此の上もないお骨折りを頂いたことであります。其の中を千辛萬苦して其の主張を貫徹せられたことは全く涙ぐましいほどに感激させられました。其の爲めに集る人も相當に多く又集つた人の素質も豫想以上によかつたことは何と云つても氏の絶大の努力に感謝せざるを得ませんでした。其の他大石からは松坂まで四五里以上もあるさうなのに我等の同志が各々自轉車を走らせて

此の會の爲めに手分けして動いて頂いたことは永い記念の一つでありました。

□四日市の集り、之は主として、眞生製陶所のみ集り云つてもよいのです。四五十名も集りましたらうか。毎度の集りの事まで今更らに、に新に云ふ必要もないかと思ひます。たゞ、に私の喜びとするところは此の製陶所が今も尙前代新兵衛氏の眞生の意義を体して活動して行くところは多くの工場と云ふ工場の中でも最も勝れたところかと思ふのであります。而も其の結果にや今日のやうな各地不況の時に際しても勞資よく協調して寸毫も事業の上に心配なく着々とする効を奏して行きつゝあることであります。□名古屋の集り、十八、九日は名古屋の集りであります。たゞ毎月の例會を繰り上げたのであります。寺での集りは別に記すほどでもありません。たゞ今回の集りが六月以來の集りである爲めか、それに土曜、日曜にまたがつてゐたためでもあるものか、可なり遠方の道友が多く集まれたと云ふことであります。西は大垣の淺野様、岐阜の古賀様、東は半田の内田様御一家、並に應稱院様、岡

崎からは佐藤様や近藤様などの同志の集りは近來にない喜びでした。

□又十八日の晩は伊藤(留吉)氏の主宰による公會堂の集りが催され、都合あつて某寺で集ることとなつたが、かうした名古屋市のやうな大都市としては大いに結構なこととして私の感謝するところでありました。又十九日の晩は丁度一晩あいて居りましたので椎尾博士の共生會に道友の二三と参りました。共生會としての集りに私が行つたのは之が初めてでありました。乍然非常に得るところが多かつたことを感謝いたしました。

□二十日の一日は一行松茸狩りに行かうと云ふ爲めにわざ／＼明けられた一日でありましたが、あまり行く人も少いので私の方から願つて止めて貰ひました。それよりも此の一日を勉學に供したいと思つたからであります。所が其の日になつてから中川様から安藤様からその御使いを受けてその方に招かれることになりました。中川様の方では私の爲めに手打ちのウドンを御馳走することであり安藤様では信仰の集りをしたいからその

ことであります。何れも結構なこととして私は喜んでまゐつたのであります。が心からなる友の集りほど私共に嬉しいことはありませぬ。其の夜は渡部様方に宿めて頂きました。殊に安藤様方では非常に面白い信仰の集りであります。が、そのことはまた改めて述べることであります。要するにその中の問題は宗教の社會生活に最も必要なる所以と、宗教が一切の生活の力となり、更に宗教があらゆる倫理と道德を超えて、而もそれを包括してゐること、今少し、今日の青年有識の階級に宗教の必要を實際に當つて宣傳せなければならぬと云ふことであります。

□焼津の集り、焼津に着いたのは二十一日の一時半でした。岐阜の古賀様と一緒にです。夕方まで前田様の裏の二階に休ませて頂き道友の二三と語り合つては夕食を頂きました。夜の集りは青年の人が多く大部新しい人も見えたやうでした。之には主として幹部の盡力が力あるかと思ひました。古賀様からも結構なお話を頂きました。氏の御話はいつも僅に一つの問題ではあるが、非常に私共として一般

に考へさせられる問題でした。聴衆の人々も一通りの喜びではありませんでした。□東京に歸つたのは其の日の夜行で、翌朝の五時何分かに歸着したのです。一家のものは未だ床の中にありましたが、私を第一に迎えてくれたものは私の妻でした。それから子供と云ふ順で旅の疲れも全く忘れたやうな喜びです。永い間の旅の中から子供を想ふことはづいこととあります。が、たまたまかうして家に歸つて一家の者から喜び迎えられる嬉しさはまた格別の嬉しさです。さるにも足らぬかうした私を私の妻や子供等はかうして喜んでくれるかと思ふとき、時々私は其の嬉しさに勿体ないさへ思ふことが度々であります。

□愚察では丁度柏崎の原(吉郎)様がお出でになつて居りました。氏は今春來議會に出られるやうになられてから、それこそ寸暇もないお急しきであります。それが反つて氏の爲めには非常な緊張と健康とを齎らしてゐるかの如く非常な喜びの中に充たされて居られます。之は亦國の爲め社會の爲めに何よりの喜びに堪えませぬ。

□其の後の私は色々の用務と永い間の旅の疲れさて二三日か四五日は録々机の前にも座ることができませんでした。乍然昨今の私はまた今までの通りに學窓の人となるべきことができました。机の前にゆつくり座るのが全く一月ぶり云ふつてよいのです。九月の十八、九日頃から今日まで或は四十日ぶりと申してよいかも知れませんが。今や飢えたる者の食にでもありつくやうに全く讀書に入りひたつて居ります。幸に無事非常な元氣で居りますからどうぞ御安神を願います。

□東京の集り、尙序乍ら一昨日の寮の集りのことを一口述べて置きます。實は先月の末、淺草の尾上樓即ち名古屋の尾上樓の支店でもお集りを願ふはずでありましたが御孫様(男)の出生で延期になりましたので、四日の集りはそれを兼ねたる集りでした。ところが集る者三十七、八名六疊二間の私の二階では全く一ぱいの集りでした。六時から八時頃まで念佛でそれから私が一時、あさは一般への座談會でありました。私の話は主として自分をどう生かすかと云ふことでありましたが。言かへれば此の身と心を無駄にせぬことです。一生を通じて此の私を

本當に働かす云ふことについての考察でありました。

ところが今回の集りには可なり新しい人が増えたのと岐阜の古賀様や、吳の片岡(憲三)様、池田喜市様、長瀬様などの集りを得、神田の佐藤助治様や深川の都築七郎様の熱心家は此の會をして更に積極的に努力して社會進出のものならしめやうではないかと云ふ相談が出たり長瀬氏の如きは新聞を發行して社會批判の發表とその社會指導の表式を明にすべしなど仲々に熱の擧るのを見ました。青木氏や其他諸氏の御説も出る云ふ始末で私として之また近來にない同友の喜びでした。因に片岡氏は目下澤川猿江町の隣保館に社會事業の方面に盡力してゐられます。此の分では東京の方でも益々同志の活動も近きにあることと思ひます。

□尙本月は十四、五、六日と佐屋の黒宮(平八)様、十七、八、九日と津島の鍵清。二十、二十一日名古屋崇徳寺。二十二日神戸の青屋藤村様方。二十三日は大阪専修寺神谷學周様方。二十四日は和歌山の方へと行くことに内定してゐます。その他は未定。

價定誌本		註文の注意	
一部	金十錢	郵税共	
半年	金六十錢	全	
一ヶ年	金一圓	全	
●講讀希望者は代金を添へて御申込下さい ●誌代は總て前金御拂込の事 ●送金は振替によるのが便利です			
昭和五年十一月十五日印刷納本			
昭和五年十一月二十日發行			
東京市芝區芝公園十四號地九番			
發行所	眞生社		
振替口座東京	四七二八八番		
編輯人	土屋 觀道		
名古屋市西區隅田町二番地			
印刷人	百々治之助		
電話西(五)二九三番			
名古屋市東區錦屋町二丁目			
印刷所	山田活版印刷所		
電話東(四)三六・七五番			
東京市芝區芝公園十四號地九番			

(大正十四年八月十三日) 昭和五年十一月十五日印刷納本 (第三種郵便物認可) 昭和五年十一月二十日發行 (毎月一回十二日發行) 第九卷第十一號